

高齢者と子どもたちの遊びの展開

—季節を感じる遊びを通して—

中西 智子¹・伊藤 雅代²

福祉法人 自由学園福祉会の理事長は、「久居老人福祉センター」と「久居保育園」開設計画の段階で、保育園入園希望は核家族の子どもの入園率が高いことを考慮に入れ、福祉センターへ通所する老人たちと保育園児が触れ合う異世代交流を念頭に入れていた。定期的に開講する『幼児との遊び方を学ぶ講座』と、さらに、不定期であるが福祉センターに所属する「老人会」との交流である。

なお、福祉センターは保育園と併設するために、子どもの生命の安全確保を考慮に入れて、福祉センターを利用する場合は会員登録をすることを求めた。会員ヘカードの発行をし、カードを身に付けた人のみが出入りするシステムである。

本稿は、退職者世代と子どもたちの〈あそび〉の実践現場から見える、今日的な高齢者と幼児の交流の形について検討した。

はじめに

2004年度開設の「久居老人福祉センター」と「久居保育園」は、同じ敷地に設計された公設民営の施設で、退職者世代と孫世代の接点を考慮して設計している。図1の如くに、両施設の間には「交流の広場」として約520m²の芝生を敷き詰め、中心にウッドデッキを敷いたスペースがあり、双方の施設の対峙側はガラスを使用している。お互いの様子を伺うことができる。

保育園の園児は核家族で共働きかひとり親の子どもが一般的で、登園から降園までの保育時間は通常8時間から11時間であるが、保護者の仕事の関係で延長保育をする。保育園児には日常生活でおじいちゃん・おばあちゃんと触れ合う機会が少ない傾向がみられることから、自由時間を持つ退職者世代の人達が園児と定期的に交流す

ることは、園児へ「おじいちゃん」「おばあちゃん」と語りかけることのできる人との出会いを用意することになる。例え短い時間であっても、「世代の違う遊び仲間」と共に過ごし、血縁と離れている幼児と老人が、次に会う約束を果たす関係である。

園児が高齢者と一緒に遊ぶ経験は、世帯人数の減少傾向の中で必要であろうと考えられる。また、保護者・保育士に加えて、安心して甘えさせてもらえる大人が増えることになる。高齢者にとっては、「遊ぶ技」で園児と余暇を楽しく充実して過ごせる経験は、自宅から出て「他者と交流する機会を増やす」と言う意味で意義深い。さらに、高齢者が園児と交流することは、地域社会での文化伝承の社会的役割をはたすことになろう。自由学園福祉会のこのような企画は、「幼」と「老」世代の一人ひとりが納得できる人間関係の構築が可能になると期待できる。

久居保育園では、四歳児・五歳児と久居福祉センター利用者との交流を積極的に計画することは、保育士と違った立場で優しく語り掛けてくれる高齢者を「お馴染みのゲストティーチャー」として位置づけた。そこで、保育園の教育担当者が福祉センターで『幼児との遊び方を学ぶ講座』の講座内容(表1)を企画して応募者を募った。福祉センター開設は6月からであり、講座開講は7月からである。講座の受講者は久居市役所の広報誌「広報ひさい No. 991. 2004年7月号(6月発行)」で募集した。

併せて、久居老人福祉センターの『老人会』とは不定期に交流をする計画を進めた。『老人会』は、福祉センターを活動拠点とする以前から地域で既に活動していたグループである。

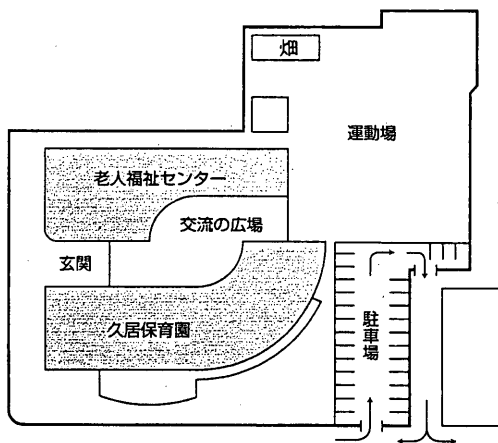


図1 老人福祉センターと久居保育園の配置図

1 三重大学教育学部

2 三重大学教育学部非常勤講師/津西幼稚園

表1『幼児との遊び方を学ぶ講座』講座の計画内容

回数	講 座 内 容
1	受講者の初顔合わせで受講生の自己紹介。現代の子ども達の社会環境・生活環境、子どもの遊びと成長の関係の講座。隣接久居保育園の現状説明などの後で折り紙（手裏剣、紙風船、紙飛行機）の確認。保育園へ移動して四歳児と五歳児計30名と折り紙で遊ぶ。
2	各人が名札を作って園児へ自己紹介をするために、彼らに判りやすいような名札や話し言葉を考える。前回の折り紙3種のメニューに‘だまし舟’を加えて保育園へ行く(写真1)。
3	園児の前では声はなるべく大きく、はっきり出して、ゆっくりと話すことの確認。語彙の少ない子どもでも理解できるように言葉を選ぶことの確認。簡単な手遊び「むすんでひらいて」等のバリエーションで十分楽しめるように、速度や歌詞の変化のことを工夫することの練習をして保育園へ行く。
4	絵本の読み聞かせの時の注意事項として、園児の人数と並び方、絵本の持ち方や位置、声の出し方声のスピードの変化、抑揚の付け方と目線の配り方の確認。照れず恥ずかしがらずに、ということでは保育園へ行く(写真2)。



写真1 折り紙活動

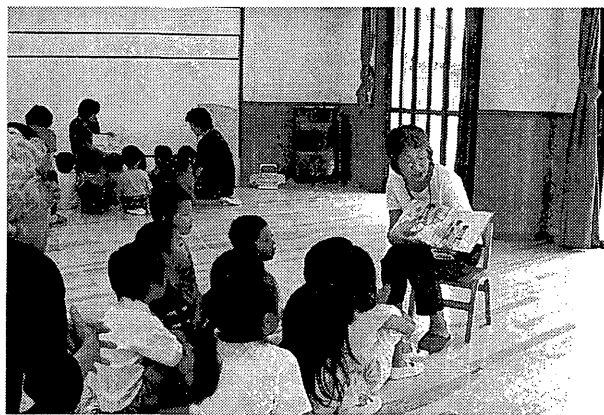


写真2 絵本の読み聞かせ

1 実践の概要

『幼児との遊び方を学ぶ講座』開設の初年度は、表1の伝承遊びを中心に活動を展開した。保育園では保育の基本的な日課は変えない。一ヶ月に2回に限り園児が「高齢者と遊ぶ」時間は、〈あなたを大切に思っている者が今日も来ましたよ〉というメッセージを伝える時間である。そして、不定期な『老人会』との交流では、室外活動の季節的なイベントの体験を組み込んだ。

1-1 『幼児との遊び方を学ぶ講座』

i) 講座は一ヶ月に2回、「幼」と「老」の交流日として第1と第2水曜日の午後2時から4時を設定。保育園では昼食後14時まで昼寝の時間帯であり、受講者は子どもたちが目覚めた後と一緒に遊ぶ。受講者と園児との交流の場所は基本的に保育園のホールとする。

2004年度は四歳児(19名)と五歳児(11名)を対象として伝承遊び、今どきの子どもたちの好きな遊び等をする。なお、久居保育園の園児は、祖父母もしくは祖母か或いは祖父と同居している幼児は四歳児と五歳児にそれぞれ2名である。

ii) 2004年度の受講希望者は、女性17名であった。

- ・受講者の年齢構成は60歳代5人、70歳代12人。
- ・幼児と一緒に暮らしている人は2人で、その他に幼い孫が居る人はいない。
- iii) 受講の動機は、昔懐かしい遊びを思い出したい、子どもの遊びを知りたい、幼児と触れ合いたい等が挙げられた。
- iv) 受講者が保育園へ出向く前に、福祉センターで遊びに必要な品々の確認と遊びの展開の確認をする。

1-2 老人福祉センターの老人会

老人会(男女で構成)とは不定期な活動の交流である。16年度は以下の通りである。

- i) さつま芋の苗植えとさつま芋の掘り出し、さつま芋を焼き芋にして食べる、などの一連の収穫を喜びあう活動(写真3)。
- ii) 年末には杵で餅つきをする活動(写真4)。

上記の活動は、老人会の人たちには例年の活動として熟練者である。保育士もこれらの経験はあるが、老人会から彼等の経験知を学ぶ機会でもある。



写真3 芋ほり

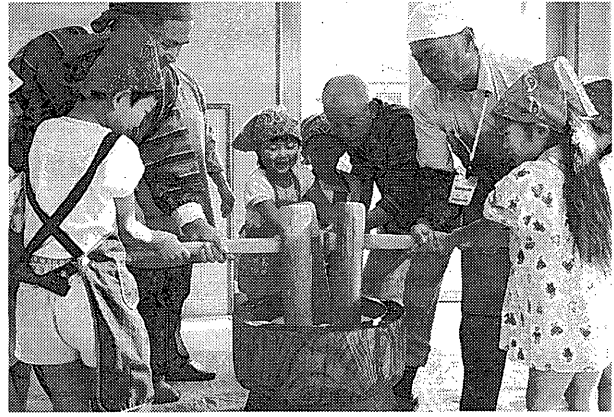


写真4 餅つき

2 高齢者と幼児の出会い

2-1 受講者と幼児の出会い

17名の受講者は単独で講座を申し込んでおり、受講者同士の顔見知りはいなかった。初日、彼らは担当者から講座開設の説明（・現在の幼児の置かれている環境 ・地域で子どもを育てることの重要性 ・生活経験の豊富な高齢者の役割りの必要性）に頷きながら聞いていた。受講者自身の幼少時の遊びについての話し合いでは、「おてだま」「あやとり」「おにごっこ」などがあがった。園児との最初の活動は折り紙で遊ぶ計画であることを伝え、忘れていたか、遊んだことが無いとのことで、練習を重ねた。保育園へ出向く際の受講者は緊張をしているようであった。園児が昼寝から目覚めて着替えを済ませ、おやつを食べ終わった頃に保育園へ着いた。

園児は受講者の姿を見るやいなや「だれ?」と保育士へ聞きに来る。「これから保育園へ遊びに来てくれるおばあちゃん達だよ」と保育士から紹介されると、「こっちが僕の部屋やに」「一緒に行こ!」などと話し掛けたり、受講者と手を繋いで歩く園児の人懐っこい姿が見られた。園児は保育士から前もって「おばあちゃん先生」が一緒に遊ぶために来ることを知らされており、何をして遊ぶのか、と楽しみに待っていたのである。

初日は折り紙活動の予定であったが園児が受講者と触れ合う中で自然に両者の会話が展開している様子から、〈園児が紹介して保育園を知ってもらう日〉に変更した。

園児には園舎内を案内することが『あそび』となったようである。活動終了時には園児から「またきてネー」の唱和に手を振って答えながら、全員が和んだ表情で解散した。

2回目・3回目と受講者同士の会話が増えていき、園児とも終始笑顔で和やかな雰囲気の中で会話が続くようになった。園児は受講者が忘れた折り紙の折り方を「おばあちゃん、僕よう知るとるよ。教えたるか?」と言われて苦笑しながら「関心やね、本当によく知ってるね」と、教えてもらっていた。中には手裏剣などの折り方を既に知って

いる子もいるが、「おばあちゃん先生」の説明に耳を傾け、教えたり教えられたりしながら、双方が満足していたようであった。

毎回、講座の教室では受講者に緊張感があり、講師からの説明を熱心に聞き、教室で自主的に練習をしてから保育園へ出かけた。園児の弾むような賑やかな声に迎えられると、すっかり「おばあちゃん先生」に切り替わっていた。例えば、絵本を読む際など伊勢弁でゆったりと穏やかな調子で進み、時には声色を変えたり、間違えても臨機応変に対応して、おばあちゃんペースの雰囲気になる。保育士からは「おばあちゃん先生の声のトーンが絵本の読み聞かせにはピッタリですね。」「上手とか下手という問題ではなくて、胸がキュンとなります。」などの賞賛の声がある。保育士も園児と一緒に聞き入る。

受講者は新聞や折り込みの広告紙、可愛いポスター等を利用したパズル等の遊びの後に、昔は身近な廃物利用で遊んでいたことを思い出すようである。受講者自身も幼児であった頃を思い、目前の幼児の心を理解しようとしている。

老人会の人たちとは運動場にある約130m²の畑で、6月には四歳児と五歳児がさつま芋のつるを挿し込む体験をした。7月には枝豆の苗を植えて8月には塩茹でして食べた。11月にはさつま芋を掘り出して保育園の全員で焼き芋パーティーをして楽しんだ。12月には保育園のホールで餅つきをするなどの交流があった。

園児には高齢者とのふれあいが少ないこともあって、園へ来てくれることがとても嬉しいようで、受講者や敬老会の人たちには寄って行って甘えている。園児は自分のこと等の話を聞いてくれる人として受け入れているようである。

2-2 受講者と幼児の待ち遠しい気持ち

出会いの回数が増えるごとに、園児は遊びながらもいつの間にか、少しの間でも手を握っていたりおばあちゃん先生の膝に乗っている子の姿が増えた。背中に覆い被さってくる子など、見るからにおばあちゃん先生と仲良

く睦ましい光景が日常化した。

園児の高齢者への対応は優しい気持ちのようである。園児からは「おばあちゃん先生はこんどいつくるの」と保育士へ聞くこともしばしばで、一緒に遊ぶことを楽しみにするようになった。紙鉄砲の遊びなどでは双方が真剣に音を出そうとする姿、新しいことを覚えるのは苦手な受講者へ、園児が「僕知っとるッ」と助っ人になる場面がある。

受講者自身が園児と遊びたい内容も取り入れることにした時には、受講生からの提案はカルタであった。保育園ではジャンボカルタを用意し、練習をして保育園へ出かけたが、とつとつと読み終えるまで園児は手を出さないうで待った。保育士とカルタをする時は早い者勝ちで競争する園児であるが、高齢者への配慮であろうか、保育士は園児が最後まで読み終えるのを待つ気持ちに驚いた。さらに保育士が驚いたのは、カルタへ手が重なった時に、「ぼくが先」「わたしが先」と主張する園児へ対して、受講者は「一番上の手の人はだれかな、こんど上になった人はだーれ?」と順番に園児が手を引き取れるように言葉掛けをしながら、「はい、最後に残った〇〇ちゃんのカルタでした。」と穏やかに采配を振るっていたことである。

受講者は過ぎた子育ての時期を思い、今日的な子ども気質を感じながら、眩しい思いで見つめてしまうと言い、元気をもらった気持ちになると言う。園児の人懐っこさと幼児特有の肌の柔らかさに癒されると言う。本来、幼児と遊ぶことを望んで受講者となった人達である。保育園を後にする時は次回の再会を楽しみにして別れている。しかし、彼女たちは保育園訪問を楽しみにしているが、身体の調子や家庭の用事で全員が揃うことはない。

2-3 活動のねらい

保育園の生活には季節感を取り入れた保育内容が基本としてある。若い人たちが季節の行事や遊び、季節の花鳥風月を楽しむ保育園での生活は、今日の家庭生活で日常的になったテレビやファミコンゲームの虚構の世界とは異質である。しかし現実的には、核家族で子育てをしている保護者には、我が子と自然との対話をゆっくり楽しむ時間的な余裕は難しいであろう。ファミコンゲームが幼児にも人気があるのはゲーム機との「対話性」があるからではないだろうか。人は、乳幼児期から対話を好むのであり、顔の見える相手と一人ひとりの成長の過程の時間の流れで対話をする、そのきっかけが遊びであり、保育士やおばあちゃん先生の存在として位置づけられる。老人会の人たちとの作業は、仲間と一緒にできる貴重な行事であろう。

3 取り組みの実際

3-1 保育園の裁量

『幼児との遊び方を学ぶ講座』は、幼児の両親とは異なる「両親の両親」世代以上の大人が情緒的教育活動に参加する内容であり、高度な技術で子ども達と交流を目的とするのではない。「幼」「老」の世代の交流を計画的に実施するのは、保育士たちも全員が初めての経験であった。

保育園の裁量で保育計画を立てる際に重要と考えたのは、以下の3点である。

- ① 園児と受講生の親和関係を深めること
 - ② 受講生には社会的活動としての参加意欲をもてる講座内容とすること
 - ③ 「幼」と「老」の世代が一緒にいて自然である実感を相互に手にしてもらえ『触れあい活動』であること
- 保育園の職員以外に外部の人たちが頻繁に参加する新しいタイプの保育であり、保育園では不測の事態が生じることを恐れた。しかし、園児の家族構成の実態把握からは、保育園が従前どおりの保育では補えないことの一つに、「幼」と「老」の世代交流があると理解した。一方で、高齢者の知恵を単発ではなく継続的に幼児へ頂く遊び空間として、健康で意欲的な人が保育園へ足を運ぶ機会を設定することを計画した。その結果、『幼児との遊び方を学ぶ講座』がスタートした。不測の事態に備えて、さまざまな対応を取り入れた。

3-2 めざす保育

保育園の教育には遊びを成立させる人間関係の育成があり、どのような可能性があるかについての検討は追及し続ける必要があろう。おばあちゃん先生が伊勢弁でとつとつと絵本を読む姿は、保育士には暖かい雰囲気を感じさせた。園児が夢中になって聞き入る姿には、クラスの全員を前に保育士が読み聞かせをする時とは違う幼児の表情がある。保育園を高齢者へ解放するのではなく、保育園を施設としての〈遊び空間〉として保育計画へ入れた成果であろう。

高齢者が福祉センターの講座で学んだ内容や続けてきた老人会の知恵を園児へ還元できる関係こそ、学ぶ人には学びの目的と、地域活動としての充実感が得られ、学びと活動の意気込みが高まるのである。園児と保育士が高齢者から受けた恩恵には、限られた保育園の構成メンバーでは得られないことが多くあった。保育園児は朝から夕方まで園に居るため、地域の人たちと接する機会が少ない。地域のおじいさんやおばあさんが自分たちのためにしてくれた事、一緒にした事の思い出は、双方が待ち遠しいと思える人間関係が基盤にあってのことであり、園児には他者を思いやる心の育成に役立ったのではないだろうか。それこそが、保育園のねらいと言えよう。

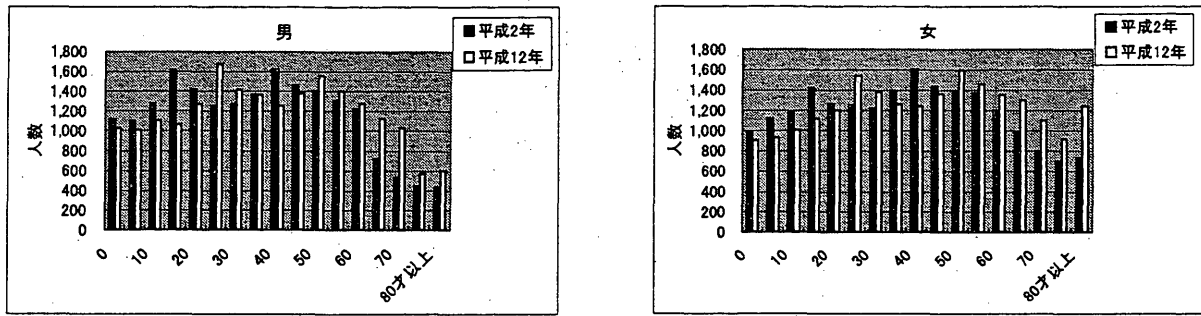


図2 年齢5歳階級別人口の比較 (国勢調査結果)

おわりに

退職世代の人にとっては、子育てを終わって以来遠ざかっていた孫世代との付き合いには「今どきの子どもはどうなのかしら…」と一抹の不安感を感じるようである。近年では、例えば「孫とかしこく付き合う法」「孫に好かれる人 孫に無視される人」などの出版物が店頭や図書館で目に付くようになった。今回、時間的に余裕のある祖父母世代の人達を対象にした『幼児との遊び方を学ぶ講座』へ参加希望をしたのは、全員が女性であった。彼女たちは余暇活動として、育ちゆく幼児と間近に接することを選択したのである。講座で幼児から「おばあちゃん先生」として慕われ、孫か孫より幼い子ども達と過ごすことが一ヶ月に2回のスケジュールとなった。

時には、園児たちと保育園の帰りや休日にスーパーマーケットや町中で出会う機会もあるようで、受講者からは「可愛い大きな声で『おばあちゃんセンサー』と言われてましてね、驚いて恥ずかしくて。〇〇ちゃんのお母さんとお挨拶しました。」などの報告がある。受講者には講座へ参加したことが、心理的にも社会的にも充実感を味わう一瞬を手にしたように推測できる。講座の位置付けとしては、地域社会での異世代交流の1つの切っ掛けと考えることができよう。

園児は遊び仲間や保育士からさまざまな価値観や行動パターンを園の雰囲気の中で習得して社会化が進んでいく。保育園での生活は教育の場であり、しつけの場である。祖父母と暮らしていない園児には、一ヶ月に2回、約30分から40分の「おばあちゃんせんせい」との交流が日常的な活動の1つとして続いている。保育園の先生とおばあちゃん先生は園児をみる視点は自ずと違う。おばあちゃん先生と少人数で一緒に遊ぶ伝承遊びは、園児たちには遊び文化を意図的に習得する機会として意義深いのではないだろうか。

子どもは家庭、学校・園、地域で育つが、核家族で共働き家庭の子どもの場合、ひとり親家庭の場合には、学

校・園において、家庭や地域の要素を積極的に取り入れて、人為的に教育計画を立てる必要があるといえよう。

平成12年の国勢調査資料(図2)では、年少人口に比べて65歳以上の高齢者数が平成2年度と比較して10年間に増加している。この傾向は、(財)日本統計協会が2002年に実施した2030年までの人口推計にも顕著である。また、久居市市民課の資料では世帯数が増えて人口減の傾向と外国人登録数の増加が明らかになっている。このような傾向からは、子どもへの遊びの継承と展開は「家族」「学校・園」という枠に限らず「地域」での生活文化の中で子ども文化を考える必要があると考える。

今後、久居老人福祉センターと久居保育園の試みが他地域でも広がることは、高齢者が子ども達の成長を支える〈地域での社会的役割〉の一つとして意義深いといえよう。

引用資料

- 1) 久居保育園作成 『幼児との遊び方を学ぶ講座』講座計画表 2004年度版
- 2) 久居市ホームページ

参考文献

- 3) 金子 勇 編著 「高齢化と少子社会」 ミネルヴァ書房 2002
- 4) 柘瀧俊子 「老いと家族」 染谷淑子編著 ミネルヴァ書房 2000
- 5) 岩波講座 現代の教育第7巻 「ゆらぐ家族と地域」 岩波書店 1998年